

NO. 12  
March '92

# NEWSLETTER

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート



## 「パーティーは終わった」? — AWI神戸 会議雑感

別府 恵子

にぎにぎしく華やかなパーティー、祭事や行事のあとで、誰しも「何かを成し遂げた」という満足感とともにある種の虚脱感を感じるのではなかろうか。それは、音楽が止み人が去った会場のテーブルの花の侘しさや床に散らばった色とりどりの紙テープの切れ端の哀れさにも例えられようが、それはまた、AWI(The Asian Women's Institute)会議が無事終えた直後の率直な感慨でもあった。

昨年9月30日から10月7日までの8日間、三田市にある関西学院の千刈セミナーハウスにおいて、三年毎に開催されるAWI「教育会議」、「学長・ディレクター協議会」のプログラムすべてを無事終えることが出来た。会議に

参加したアジア6ヵ国の代表者たちが、それぞれに会議の成果を持って帰国の途について、はや5ヶ月。会議の公式報告は色々なかたちで届けられつつある。AWIの機関誌*Asian Woman*はAWI神戸会議の特集号を企画しており、その第一号が昨年末届けられた。主催校として会議の成功を喜ぶとともに、会議の準備、会議期間中の会議運営、そして会議の残務整理に協力して下さった教職員や学生の皆さんにあらためて感謝したい。

さて会議の報告をとのことだが、会議全般およびシーヴァ氏の基調講演の報告は、『学報』(1991年12月)や『大学時報』(1992年1月)ですでにさせていただいた。そこでここでは、会議後に考えさせられた課題の一端を述べたい。なぜなら、AWI会議の真の成果はこれから岡田山キャンパスの色々な場で実を結ぶことだろうし、女性学インスティテュートがする仕事も残っているからである。決して「パーティーは終わった」わけではないのだから。

その一つ。周知のとおり、この度のAWI会議は新しい試みとして、従来の「教育会議」、「学長・ディレクター協議会」と教授・学生交換プログラムを合体して開催された。主催校である本学は、本会議前の三日間、レバノン、パキスタン、インドからの教授・学生6名の一行を岡田山キャンパスに迎えたのだが、このプログラムの企画、運営に積極的に参加、協力してくれたのが予想外に多くの学生たち——それも学科、学年を問わず——だったことが関係者一同うれしかった。また、千刈セミナーハウスでの会議二日目のカルチャー・イブニングで披露された多数のクラブ、同好会の学生たちの美技もまだ記憶に新しい。そうした学生たちの活動を通して、アジア各国の代表者たちはつぶさに現代の日本を知ったのではなかろうか。

もちろん、異文化体験といっても短期間のこと、文化交流といっても皮相的にならざるを得ないであろう。しかし、大切なことはまず、実体に触れて知ること。「百聞は一見にしかず」である。AWI会議を通して、教職員も学生もそれぞれの立場、それぞれの思いでアジア諸国の人々と交わったことと思う。それが、これから何らかの形で活かされていくことを期待したい。特に、この度の教授・学生交換プログラムは、新しい試みの第一ラウンドの前半を終えたところ。後半は日本、韓国、フィリピンからの教授・学生のグループがインド、パキスタン、レバノンを訪問・視察してプログラムが完了するが、その時には本学の学生も是非参加して欲しいと思う。こうした小さな交流を継続していくことが、AWI加盟校としての義務というより最も大切な仕事だと確信する。

いま一つの点は、本会議のテーマ「テクノロジー時代における女性と環境」の環境問題に関して、参加各国の間でその認識、問題意識にかなりの格差があるということ。したがって、当然のことながら参加者たちは会議の決議事項を持ち帰ってそれぞれの国情に応じた対処策を考えねばならないということである。それにはまず、それぞれの教育の場における意識革命が必要だが、これまたAWI加盟13校の間でも、女子の高等教育、女性の自立についての理解、意識に偏差がある。そして、残念ながら先進工業国である日本が意識の上でも進んでいるとは必ずしも言えない。なぜなら、儒教の教えがまだ根強い韓国などにおける性差別に比べて、日本では性差別が見えないように見えるだけに、差別的言動に対する私たちの対応が曖昧になったり、その反応が鈍くなっているのが実状である。AWI加盟校の条件として、キリスト教主義に基づく女子大学であることと、「女性学」研究所を備えていることが挙げられている。この度AWI会議を終え

て、第二番目の条件の意味するところ、本学における女性学インスティテュートの存在および機能をあらためて考えさせられるこの頃である。決して「パーティーは終わった」のではない。

(AWI会議実行委員長 英文学科教授)

## 〈やぎの会〉が結成されました!! ～牛乳パック・古紙回収にご協力ください～

「やぎの会」は昨年のAWI会議参加がきっかけとなって今年の2月に結成された、身近なところから環境問題を考えようという学生有志の集まりです。

現在の活動としては、①牛乳パック回収(ティッシュペーパー、トイレットペーパーに再生)と②古紙回収(コピー用紙に再生)を行っています。今回、後期のテスト期間中に試験的に回収箱をロッカールームに設置したのですが、たった二週間のうちにダンボール4箱分も集まったコピー用紙の量には、大変びっくりしました。また、牛乳パックについても予想を上回る回収ができ、皆さんのリサイクル運動に対するご理解、ご協力に心より感謝いたします。ただ、ひとつ残念なことに回収箱に入れる際の注意はあまり守られていなかったようです。回収箱に入れるときには、以下の点にご注意ください。

### 1. 牛乳パック回収について

①よく洗って、乾かして、切り開き、一枚のシートにして、入れてください。牛乳の成分が残っていると腐敗して再生できません。

②再生できるパックは、牛乳・ジュースなどの1,000cc、500ccの内側が白いものに限りです。

### 2. 古紙回収について

①色のついた紙、表面に光沢のある紙(ポスター・パンフレットなど)は再生できないので、絶対に入れないでください。

②ホッチキス、セロテープ、クリップなどは、必ずはずしてから入れてください。

③書籍・雑誌・ノートなどを入れるときは、表紙の部分を取りはずしてください。

牛乳パックや古紙を製紙原料として再利用すれば、その分だけ木材の消費が減り、現在世界的に問題になっている森林資源の保護をはかることができます。また、紙ゴミの減量にも役立ちます。パックのリサイクルや紙ゴミの分別作業は、けっこうめんどくさいものですが、ひとりひとりがちょっと気をつければ必ず大きな成果につながっていきます。「やぎの会」では4月以降も回収箱を

ロッカールームに設置しますので、引き続きご協力をお願いいたします。

今後の活動はまだ模索中ですが、再生紙商品の紹介・頒布や、「カスカードの袋は再利用しよう運動」（ゴミの減量につながります）などを検討しています。

関心のある方、いいアイディアのある方は、女性学インスティテュート（デフォレスト館3階303号室）まで。

## 韓国留学便り

### 山本かほり

立春が過ぎ、春が近いことを感じさせる日差しが、ソウルの街にも差し込むようになった。まだまだ風は冷たく、雪も降る。あと何度かは氷点下10度以下の気温に襲われることも覚悟しているが、体が凍りつくような思いを体験しただけに、春の訪れが待ち遠しい。

寒い日には、オンドル（床暖房）の効いた部屋で過ごすことが多い。外から聞こえてくる雪の音、厳しい寒さの中で商売をする人の声、凍りついた地面でスケートを楽しむ子供たちの声などを聞きながら、あれこれと考えを巡らすことが習慣のようにになっている。暫し、家族を含めたしがらみからも解放され、精神的には自由な留学生活ではあるが、生きることに對する漠然とした不安に襲われ、何となく人恋しい気分になってしまう。そんな時に限って、下宿の友人たちがヒョッコリ私を訪ねて来てくれる。そんな何げない友人たちの行為に励まされるようにして、私はソウルでの留学生活を続けている。

言葉がほとんどできなかった私を、下宿の学生たちは暖かく迎えてくれた。私も韓国的な人間付き合いに戸惑いを感じながらも、「郷に従う」努力を続けた。そうしているうちにお互いの間に「ミウン（憎い）情・コウン（美しい）情」（一緒にいれば楽しいこともあり、ケンカもある、そういうことを続けながら、人間の間に生まれる情を韓国ではこう呼ぶ）が生まれた。しかし、親しくなればなるほど複雑な感情の入り交じった「対日意識」を感じるようになった。

韓国の若い世代にとって、日本はどのような国なのだろうか？36年間にわたる植民地支配、朝鮮戦争という自国の悲劇を背景にした経済成長、そして現在の経済依存。痛烈な日本批判に出会うことはしばしばであるが、その反面、韓国の大企業は日本語教育に熱を入れているし、日本製を求める人も多い。韓国人の生活の至るところに、日本が入り込み、それを何の抵抗もなく人々が受け入れているような気がする。政治的なことから日常の小さな

ことまで、日本との比較をしたがる。猛烈なライバル意識に、私のほうが疲れてしまうこともある。

もちろん、日本が常に比較の対象となることの背景には、1910年から1945年の植民地支配（韓国では日帝時代と呼ぶ）がある。「克日が韓国人の頭に常にあるよ。いつかは追い越し、勝ちたい国だよ。」何度、この言葉を聞いたか分からない。政治、経済力はもとより、スポーツでも「対日本」となると、すごい熱狂ぶりである。韓国が負けた場合は、何となく下宿ににくい雰囲気になまざることがある。

このような「対日意識」が政治の場に浮上した時には、私は下宿ばかりか、韓国ににくい気持ちになることがある。特に「植民地責任」をめぐる問題が、韓日間で協議されている時は。今は従軍慰安婦の問題が大きな問題として取り上げられている。政府間での協議は問題の本質を隠し、政治的に利用しているだけのような感もあるが、それでも、一般の人々の関心は高い。日本人である私と外出するのを戸惑うと友人たちが言う程に、「反日感情」は、膨れ上がっている。日本側が率直に過去の過ちを認めないことに對するいらだち・怒りが、新聞の社説でも連日のように書かれている。

歴史感覚・歴史認識——韓日のズレは大きい。片方は、学校や家庭で植民地時代の体験を教えられている。私たちの側は、遠い過去の出来事のようにしか感じられなくなっている。このズレをもったまま、韓国と韓国人に向き合った場合、何かを共有する可能性はあるのだろうか。過去の辛い記憶を忘れたくても忘れられない人々がまだ存在しているのだ。植民地支配を体験した世代でなくても、歴史が日本人に負わせた責任というものを受けとめていかななくてはならないと思う。それは日本人にとって、重く、しんどいことではある。しかし、その重みを受けとめることによって初めて、お互いの間に共有できる何かが生まれるのではないだろうか。日本が植民地責任に對して、現在のようなその場逃れの態度を続けている限り、韓国人は私たちを等身大に見ることができないであろう。国を越えて人と付き合うことは、決して簡単なことではない。安易に日本人であることを意識の上で越してしまうような虚偽のコスモポリタニズムは、断固として拒否しなくてはいけないと感じている。

私もまだ、日本と韓国の間にある歴史と正面から向き合っていると切り切れる自信はない。しかし、現在のエヌニックブームに乗った「韓国ブーム」に對しては、厳しい批判をしていきたいと思う。ブームはブームでしかなく、底の浅いものだからである。時流に流されることなく、等身大の韓国を見つめる努力を続けながら、ここ

で留学生を送りたいと思う。人には、肩の力が入り過ぎた、融通のきかない人間に映ることもあるようだが、そういう努力を続けながら、日本人である自己を厳しく追求し続けたい。

※本稿では「韓国」という言葉を使用した。決して、「北朝鮮」を無視してのものではないことを断っておきたい。歴史責任という意味においては、朝鮮半島全体にある。

(大学卒業生 E104、大学院修了生 S107)

## 「男たちよ、女たちよ」

岡本道雄

近頃ゼミの卒業生の結婚式に出て思うことは、一つには花嫁の年齢が、10年前、20年前に比べて上がって来たことと、今一つは、結婚しても直ちに仕事をやめる女性が少なくなり、子供ができるまでは仕事を続けたい、子供ができて実家などが近く、子供を世話してくれる人があれば仕事を続けたいという女性が多くなったことである。男女雇用機会均等法も、まだまだ不十分な法律ではあるだろうが、この法律ができ、企業等にも「総合職」といった職種が設けられ、女性にもある程度責任ある仕事が任せられるようになったことも、このような現象と無関係ではないだろう。21世紀においては女性の活躍の場はますます広がり、社会や文化への貢献度も一層大きくなるだろう。

しかし女性の「仕事と家事・育児の両立」といったことを考えてみた場合、必ずしも楽観は許されない。10年ほど前女性運動家のベティ・フリーダンは、『セカンド・ステージ』の中で、男女の家事の平等な分担を説いた。その後確かに、我が国でも家事・育児に協力する若い男性も増えて来たが、まだまだ少数派であると思う。女性が仕事をし、男性が家事・育児をするというケースもあり得るだろうが、こればかりでも困るだろう。

ヨーロッパでは仕事と家庭生活を両立させるために、両立できる相手が見付かるまで「試験結婚」をしてみるというようなことも行なわれているが、どうも我が国の風土にはなじみ難いように思われる。

明治期に数多くの「婦人論」を書いた福沢諭吉は女性のための婦人論ではなく、当時の一夫多妻制を当然とする男性を啓蒙するための婦人論を書いた。今後「女性の自立」や「仕事と家事・育児の両立」を考える場合にも、必要なことは、新しい意味での粘り強い男性への啓蒙であり、男性の協力への要請であろう。その意味では、これからの「女性学」は、その中に男性論や、男女協力論を含んだものであることが望ましいと、私には思えるのである。

(総合文化学科教授)

## 1991年度活動報告

講演会 1991年7月3日(水)

「今、環境問題は」 川合真一郎食物学科教授

AWI (The Asian Women's Institute) 会議開催

日程：教育会議 (1991年9月30日～10月2日)

学長・ディレクター協議会 (10月3日～5日)

執行委員会 (10月6日～7日)

場所：関西学院千刈セミナーハウス (三田市)

テーマ：テクノロジー時代における女性と環境

〈基調講演〉 1991年9月30日(月)

「種子と大地—女性、生態系、とバイオテクノロジー」  
ヴァンダナ・シーヴァ氏 (インド：テラ・ダン環境生態学研究所長)

〈講演〉 1991年10月1日(火)

「神戸女学院大学における環境教育と研究」

川合真一郎食物学科教授

〈発表〉 1991年10月1日(火)

「日本における熱帯林保護運動の視点」

平井雅子英文学科教授

〈講演〉 1991年10月3日(水)

「多文化交流がもたらす環境への影響」

山中昭夫氏 (神戸海星病院院長、家庭会会長)

## 図書・資料をご利用下さい

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および定期行物、ビデオ、講演会のテープ、その他の資料を収集、整理し、学生および教職員の方々のご利用をお待ちしています。閲覧と貸し出し希望の方はD館303号室までお越し下さい。

開室時間 (月)～(金) 8:30～16:30

(11:45～12:45以外)

## ニューズレター特別号の発行準備すすむ

昨年のAWI会議に参加した学生ボランティア・スタッフの特集号が、本年6月に発行される予定です。ご期待下さい。

## 1991年度女性学インスティテュート編集委員

廣澤節子(委員長)、真栄平房昭、丸島令子、渡部充、山内祥史(ABC順)

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545